

【3月の草花】

シュンラン（春蘭） ラン科 多年草 花期；3~4月 場所；1号棟北側駐車場と北進入路の間

シュンランは日本を代表する野生ランの一種で、洋ランのシンビジウムの仲間です。そして、江戸時代から育種、栽培されている古典園芸植物です。



(上) 今年は1株に4~5本茎を出した。(17 3/16)
シュンランの花は皆下向きでなかなか見られない。

(右上) 横から(15 3/29) (右) 正面から(17 3/25)



シュンランは早春から春に、地際から花茎を出し、その先端に淡い黄緑色の花を1輪咲かせます。地味な花ですが、その野趣、素朴さが好まれているのです。どのように好まれているかは、ホームページを検索してみると、「たたずまいは凜として孤高の雰囲気を放ち、萌え出した若芽の色彩は爽やかで、日本の早春に相応しい」とか、「シュンランはカタクリと並ぶ、スプリングエフェメラルの代表種である」と、べた褒めの記事がすぐに見つかるほどです。

また、このラン科の植物は、菌類（キノコ）から栄養を得て生活しているという変わった性質もあります。すぐ隣にキンランが生えているので、同じ環境を分け合っているのかもしれませんが。

タチツボスミレ スミレ科 多年草

花期；4~5月 場所；北法面、東法面随所

日本にはスミレの仲間は変種も含めて50~70種もあるなかで、タチツボスミレはごく身近に、もっとも普通に見られるスミレである。その意味で、日本を代表するスミレである。（写真 15 3/23 →）



身近な草木花 3月

花は直径1.5~2センチで、薄紫色。葉は長さ2~4センチの心形(ハート型)。タチツボスミレの名の「つぼ(坪)」は庭を意味していて、「庭のようにどこにでも普通に見られる」の意味。「立ち」は、スミレの花が終わって茎を上へと伸ばしてくるから、そして、「すみれ」は、その花の形が大工道具の「墨入れ」を思わせるから”との事。(ただし、この説には異論も多いようだ)



タチツボスミレの花 (左) 正面から 15 3/29



(右) 横から 花の後ろには距(きょ)がある (17 3/25)

タチツボスミレにはもうひとつ面白い現象があります。花期を4~5月としましたが、5月の連休の頃タチツボスミレを見に行ってください。“つぼみ”のようなものがついています。が、これは開花しません。触ってみると固くて、もう種ができています。これは「閉鎖花」といって、開花せず自家受粉して結実しているのです。そして、開花する方の花(解放花)の結実率は低く、閉鎖花の方がもっぱら結実して種族を残す役目を担っているとの事です。

(写真右、閉鎖花。開花せずに結実している 15 5/6)

多くの花が自家受粉を避けて、雄しべと雌しべの長さを変えたり、花粉の時期をずらしたり、さまざまな工夫をしているのに、不思議な現象ですね。

早春には他の草に先駆けて花を咲かせて虫を呼び交配してもらい、草木が茂ってスミレが埋もれてしまっからは自家受粉で種子をつくる。解放花では遺伝子の多様化の「質」を高め、閉鎖花では子孫繁栄の「量」を図る。スミレは競争力が弱いので、このように2本立ての生存戦略をとっているらしいのです。でも、やはり不思議ですね。



雪割草(スハマソウ) キンポウゲ科 多年草 花期;2月下旬~5月上旬 場所;北法面

10号棟北側法面のオオバヤシャブシの根元に生えている雪割草は、今年は3月11日頃に芽を出した。いつ開花するのかと時々見に行ったが、花茎が伸びてきても半開きの花を下向きにつけたままなかなか花を開かなかった。ある方にこの話をすると、「今年は寒いのでなかなか開かないのでは」との事。いっぱい花を開いたのを確認したのは3月25日だった。翌日26日は冷たい雨の日だった。念のため見に行くと、花は半ば閉じて下向きになっていた。暖かく晴れた日には開き、寒く曇りや雨の日には閉じる。

身近な草木花 3月

この雪割草も日光を好む植物のようだ。



(左) 芽が出てきた (3/11) (中) 開きそうでなかなか開かない (3/24) (右) 冷たい雨の中でまた閉じてしまった (3/26)



(左) いっぱいに花開いた雪割草 (3/25)



(右) スハマソウの葉(15 4/2)

雪割草は、「春早く、雪の消えるのを待ちかねて地表に顔を出す花」という意味で、サクラソウ科、キンポウゲ科、ユリ科など、7科10種類ほどの早春の花の総称として用いられています。つまり、英語圏のスプリング・エフェメラルと似た意味合いを持ってそう呼ばれているようです。

スハマソウの葉は、花が咲き始めた時は傷んだ前年の葉が残っているが、花の終り頃に新しい葉が伸びてくる。丸みのある葉に注意。



花弁の数の違い、6枚、7枚、8枚。こんな花も珍しい。しかも花弁ではなく萼片とのこと。

身近な草木花 3月

和名で「ユキワリソウ」と言った場合、正式にはサクラソウ科の全然違う植物のことを指します。

(写真右；サクラソウ科のユキワリソウ HP より)

それで、これらを区別するためキンポウゲ科のミスミソウやスハマソウの仲間は「雪割草」と漢字で表現しているようです。

ここで、ミスミソウとは葉の形が三角状の種類、スハマソウとは葉の形が、海辺の砂洲に似ているという意味で州浜草と書きます。北法面の雪割草はスハマソウです。(前ページ写真参照)

が、この区別があまり明確ではない場合もあるようで、スハマソウはミスミソウの一品種との事。花弁は6~8枚程度でバラツキがあります。実は花弁に見えるのは萼片で、花弁はないとの事。他の品種では雄しべ雌しべも花弁のように変形するものもあるとの事で、とてもバラエティに富む花のようです。

雪割草の各品種の自生地を分布を見れば、スハマソウは岩手県から神奈川にかけての太平洋側に分布しています。が、実はこの雪割草は高山植物ではなく平地の山野草で、育てやすい植物とのこと。江戸時代ころから栽培されてきたようです。インターネットの検索でも、雪割草の記事にはどれも、栽培上の注意なども記されています。『多摩市の目録』には野草としての報告もない。ということは、この北法面の雪割草は、植木鉢の土とともに捨てられ、ここに根付いたものと推測されます。



ハナニラ（イエイオン、イフェイオン） ユリ科 多年草 花期；3~4月

場所；9号棟南側、他居住区、法面随所

アルゼンチン原産の多年草、明治時代に園芸植物として導入され、花壇から飛び出し野草化している。わが団地でも居住区だけでなく、法面にも所々生えている。



(左) 群がって咲く星型の花が美しい (15 3/29) (右) 居住棟の生垣の根元に植えられている

花は白から薄紫色の6弁の花で、英名では「スプリング・スターフラワー」と呼ばれている、星型のかわいい花である。9号棟の前にいっぱい咲いているのはきれいですね。

茎や葉を折るとニラのような匂いがあるので和名ではハナニラと呼ばれています。ただし、食用の“花

身近な草木花 3月

にら”とは別で、こちらは食べられません。



花の色は白から薄紫色に微妙に異なる (15 3/12, 3/25, 3/12 撮影)

繁殖力が旺盛な植物で、球根を一度植えつけその土地に馴染んでしまうと、翌年以降よく増えて、いっそう花を咲かせるようになる。年3回の草取りにも根元まで刈り込まれても、また生えてくるのを見ると、生命力の強い植物であることが分かります。但し、園芸上の注意に、「花後も自然に枯れてくるまでは放っておきます。邪魔でも刈ってはいけません」とある。草取りに根元まで刈り込めば、光合成ができず、球根に養分を蓄えられず、いつかは消えてしまうかもしれません。(住宅周りの花をどうするか一考の余地あり)

ツルニチニチソウ (ツルピンカ) キョウチクトウ科 多年草・亜低木

花期；3月半ば～5月 場所；2号棟北側、南側、3号棟東側など

南ヨーロッパ、北アフリカ原産の、つる性の多年草または亜低木に分類されている。属名のピンカは「結ぶ」の意味で、つるを花輪に利用したからとのこと。



(左) ツルニチニチソウ (17 3/25)

(右) 斑入りのツルニチニチソウ (14 4/17)

ツルニチニチソウは常緑性でつるは地面を這うように伸びるので、グランドカバーとして利用されている。しかし、生育が旺盛でつるがよく広がる植物なので、栽培上の注意に、「伸びすぎたつるは適宜間引いて整理する。植える場所をよく考えて、広げたくない場合はつるの切り戻しを定期的に行う。放っておくと、辺り一面盛大に茂ってしまう」とある。2号棟北西部の空地に植えられたツルニチニチソウも、

あまりに繁茂過ぎるので、草刈り時に刈り込んでいる。

花の色は晴天の青空に似た青紫色でキキョウを思わせるようで、別名にツルギキョウとも呼ばれている。しかし、注意すべき事はツルギキョウは全く別の植物にもある。



(写真右、ツルギキョウ (キキョウ科) HP から) → 神代植物園の「グリーンギャラリー」に、ツルニチニチソウが紹介されているが、「ツルニチニチソウと呼ばれるツルギキョウの紫が目につき」とあり、花の写真に「ツルギキョウ」とある。まったく取り違えて書いている。神代植物園ともあろうものが、こんなことでは困る。

(神代植物園の「季節のスケッチ」には、間違いなくツルニチニチソウとあった。が、他の一般人のHPにも間違いが波及しているので要注意！)

植物名を記す場合には、うる覚えで済ますのではなく、図鑑で確認すべきである。



(参考) 当団地北側のブリリアの市道沿いのフェンスの中に植えられているのは、花も葉も一回り小さいヒメツルニチニチソウという品種です。(写真左)

スプリングエフェメラルについて

「スプリング・エフェメラル」は「春の妖精」とも呼ばれていますが、直訳すれば「春の儂きものたち」で、早春の植物を言います。春、早いうちに芽を出し、すぐに花を付け、気がついた時にはもう消えてしまっている植物のことをいいます。カタクリ、フクジュソウ、イチリンソウ、ニリンソウなどを指します。

今回紹介した花では、雪割草やシュンランがその仲間です。

雪割草はこのような意味を持たせて呼ばれている事は上に記しました。

シュンランについては、ちょっとコメントが必要です。シュンランは常にヤブランに似た細い葉を伸ばしています。つまり常緑の野草です。だから厳密にはスプリング・エフェメラルとは言えないようです。しかし、先に紹介しましたように、その花のはかなさ、美しさ、希少さから、「日本のスプリング・エフェメラル」に数える声も多いのです。

【参考書】

- 『山溪ハンディ図鑑 6 日本のスミレ』 いがりまさし 山と溪谷社
- HP ; Wikipedia、ヤサシイエンゲイ、みんなの趣味の園芸、他各種のページを参考にしました。

(文・写真 ; 石川)